

第2回越後平野における生態系ネットワーク推進協議会 議事要旨

■日時：令和2年2月20日（木） 15:00～17:00

■場所：新潟大学 駅南キャンパスときめいと 講義室

○議事

- (1) 前回（第1回）の報告
- (2) 全国における生態系ネットワークの取組状況について
- (3) 全体構想の策定に向けて

（委員 A）

- 推進体制につきまして、協議会を支える様々なワーキンググループを作るとするのは非常に良い。しかし、エコツーリズム、人・地域づくり、環境保全農業等の他、生息環境の評価や、不足する自然の再生、あるいはどこのネットワークを繋げていくのか、そのような論点を議論するワーキングが必要ではないか。

（会長）

- 指標種であるハクチョウやトキにとって、どのような生息環境の整備、ネットワークが必要なのかという土台となる情報を整理してから、協議会で計画するネットワークの話について話し合うとより強固なるので、そのような情報が必要。
- 地域経済の活性化を促していく中では、社会科学的な検証等も必要となり、取組み自体を評価し、本協議会に対して様々なたたき台を出していくような情報を練る、ブレイン的なワーキングを設置するのも良い。

（委員 A）

- 新たに全ての調査を実施するというのは、短期間では難しいため、委員の既存の調査結果から、ベースとなる情報を作れるはず。その他、新潟には例えば信濃川、阿賀野川水系の魚類に非常に詳しい方もおられ、ヒアリングすることで、基本的な情報や課題等も出てくる。そのような、生き物に関する情報をしっかりと整理していくような体制が必要。

(会長)

- 越後平野の生き物に関する情報整理を行い、その地域の中でどのような取組みが可能か検討していくようなステップが良い。

(オブザーバー)

- 生息環境の整備、ネットワークの必要性など土台となる情報を整理する中で、農業の役割についても整理いただくことが必要。現在、労働力の不足、農地の集積・大規模化、高収益作物への転換等農業を取り巻く環境が大きく変化しており、農家の方々も取り組むことが多い状況。本ネットワークにおいて、うまく連携して取り組むためにも、農業のどのような部分で貢献すべきであるかなど、明確にしてもらうことが重要。

(委員 B)

- 今後、温暖化による影響が、顕著になるだろうと言われており、指標種自体が生態系の変化によって影響が出てくることが考えられる。別の観点から、防災減災、Eco-DRR ということで、人口減少や豪雨による農地撤退が起こった時、生態系ネットワークの概念は非常に親和性がある。そのような視点も視野に入れた全体構想を考えた方が、教育的な効果があるのではないか。

(会長)

- 放棄されていく農地が増えていく中、都市農村機能の低下を防ぐために、そのような農地をどのように管理していくのか、生態系ネットワーク形成のベースとなる考えに組み込んでおくのは非常に重要。市民、県民の安全性に繋がるという点を、最終的なエンドポイントに掲げる目標もあっても良い。

(4) 指標種の保全・活用に関する取組み (話題提供)

1) ラムサール条約の湿地について

(委員 A)

- 自治体が様々な PR をしていく中、ラムサール条約湿地や優れた水環境のイメージはすごく大きい。ぜひ本日参加されている自治体の方々も首長さんを連れて来ていただき、自治体のブランド化にあたり、優れた環境の良さとい

うものを活用していただきたい。

(会長)

- 越後平野が水辺の町であると対外的にアピールするというのは、国際的にも非常に綺麗な町のイメージを与えることができる。それに伴い、暮らしている人達、様々な生業をしている人達にとっては、生産物等に様々な付加価値が付き、ラムサールシティで生産されているものは安心安全だといった良いイメージが得られることになる。

(委員 C)

- 例えば、福島潟の地籍は新潟市にあっても、隣が新発田市であるため、お互いに連携協力して、その地域の皆様に啓発、啓蒙をすると大きな効果がある。素晴らしい温泉地もあるので、インバウンド等も考えても、有効な場所である。

2) トキの本土における野生復帰に向けて

(委員 D)

- 本土の定着というのはこれからの話であり、どのように県民の皆様にこの計画自体を発信していくのか、その中で指標種の定義についても1回整理をする必要がある。

(環境省)

- 本協議会でトキの目標を先に立ててしまうと、トキ野生復帰検討会の方と整合が取れなくなる可能性があるなので、上手に連携していく必要がある。

(会長)

- 個体数等の具体的な目標より、社会的な合意形成を進めながら、トキやコウノトリが戻って来てくれるような地域の啓蒙普及、地域の環境に対する意識向上を図っていくような取組みの目標を定めていただきたい。

(委員 A)

- 佐渡からトキが出てくる日も、そう遠くはないのではと考えている。それを

受け入れる地域、トキの利用環境のポテンシャルがどのようなところにあるのか、例えば該当の地域に採食環境の面で見ると課題がないか等、事前に整理をしていく必要もある。

(会長)

- ▶ トキが飛来した際に、定着や繁殖への展開等にどのように繋げていくか、それにはおそらく地域のステークホルダーの人達との合意形成が重要。生息地環境整備と共に、社会的な合意形成も進めていくと、受け入れ体制が整ってくる。それには、ある程度の時間も必要になるため、中長期的に考えていくのであれば、並行して進めていくことが必要。
- ▶ 個体数が急速に増えているため、今後、本土への飛来数が急激に増えたり、本土での放鳥が進められたりする可能性もある。そのような期待をしながら、本協議会の中でも越後平野でのトキの生息環境の整備や、地域の環境に対する意識形成とリンクさせながら進めていけると良い。

3) その他

(委員 E)

- ▶ コハクチョウの飛来数が日本一である越後平野は、ハクチョウに選ばれた平野であり、理由としてはハビタットの関係であり、潟などの安心できるねぐら(埧)と、採食地となる田んぼ等がセットであることが大きい。なかでもハクチョウが飛来するのは農家の米づくりの関わりの結果ともいえる。このような視点から田んぼの価値がピックアップされ、農家の認識や利益に繋がると良い。そういう物語を、物産の商品やエコツーリズム等の観光に活かしたい。また、これらの観点でラムサールの都市認証、SDGs と絡めた企業との連携等、手を繋ぐというのが最も肝心。

(会長)

- ▶ 大型水鳥類は環境変化によって、潟の間の移動を活発に行なっており、繋がりがあがる。そのような生態系ネットワークをどのように担保していくのか、本協議会の中でしっかりとした議論をし、配慮事項を整理する必要がある。人の関わりやその地域の人達の生業に活かし、ストーリーを作っていくことが、対外的アピールに非常に効果がある。それを本協議会でしっかり作って

いくことが必要。

(委員 A)

- 吉野川の取組みでは、金融関係や、観光関連の方達も参加している。エコツアーリズムを実施する際に、お金の帳尻をどのように合わせるか、どのように人を呼ぶか等、現実的な意見をもらえる。そのような知見、経験がある方等がいないと、取組みは中々進まない。ぜひ今後、そのような方達に入っただいて、動いていけると良い。

(5) その他

(会長)

- 協議会は年 1、2 回程の開催となりますが、そうすると全体的な構成がまとめ上がるまでにかかなりの時間を要してしまう。実際に動き始めるのが数年後ということになりかねないので、早いうちに全体構想案を作り、具体的に動き出せるワーキングの案や骨子、ある程度のワーキングのメンバーをリストアップしておく必要がある。メール会議でも良いので、可能であれば、春から初夏頃に 1 回行うのが良いが、早めに全体構成、骨子をまとめ、動き出せる体制を作ったほうが良い。立ち上げは非常に重要であるため、途中はメール審議等で、本協議会の場でオンライン化し、その結果を踏まえて動き始めるのが望ましい。
- また、市長や町長等の首長に参加していただくと、会としてのモチベーションも上がるので、首長の参画をぜひ検討いただきたい。ぜひこのラムサール条約湿地自治体都市認証と生態系ネットワーク形成の話をつなぎながら進めていただきたいというのが、私からの要望。

以 上